



～口癖は心癖に、心癖は口癖に～

「落ち着いたクラスが多いですね。子どもたちもしっかり育っているように思います。本当にありがたいです。」

人権教育参観日（6月24日）が終わった時のことです。帰路につかれる皆様にご挨拶を申し上げた際、何人もの（地域の）方々が異口同音におっしゃいました。感謝の気持ちでいっぱいになり「課題も多々ございますが、皆様方のおかげさまで。」と私はお礼を申し上げました。するとお辞儀とともに、

「ありがたいことです。来させていただき、本当にありがとうございました。」

というお礼の言葉を、とりわけご年配の方々から多くいただきました。

私は本校に着任させていただいて三年目となりますが、ふと考えれば西岐波では「ありがたい」を口に出される方が多いこと、そして地域を歩いていても「ありがとうございます」とお声をかけていただくことが多いことにもあらためて思いが至りました。先日も道端で「校長先生、子どもらを大事にしてもらうて、本当にありがとうございます。」と、老婦人からていねいなお声かけをいただき恐縮したばかりです。

西岐波には「ありがたい」という言葉を日常とする、温かな文化風土があります。「西岐波という町の良いところ 好きなところ」という問い（アンケート）に対して多くの六年生が「人が優しい」「笑顔とあいさつが多い」「あいさつには必ず返事が返ってくる、知らない方でも『おかえり』と言ってくださる」などと記しており、心が温かくなりました。

そうです。「口癖は心癖」になります。そして「心癖は口癖」でもあります。地域にしっかりと残る、この温かな「心癖」と「口癖」を、子どもたちに確かに引き継がせたい。目の前の「たからもの」「未来からのあずかりもの」である子どもたちを見て、あらためてその思いを強くします。

ただし「ありがとう」に表す、この感謝の心は、大人が総出で育てていくものでもあります。決して自然発生的に感謝の心が芽生え育ってくるものではありません。特に昨今、私たちは「インターネット」「コンビニ」「スマホ」など、「即座の反応」を求め、それらを「よいもの」として生活しています。たしかに先人のおかげで平和と豊かさを享受でき、便利な中で暮らせることは素晴らしいことです。しかし、反面それらの中で「待つ」ことへの耐性は驚くほど弱まっています。そしてなにとともに「揃っていて当たり前」であり、不本意なことに対しては「おかしい」「誰かが悪い」と捉えてしまいがちでもあります。

一見当たり前に見えることもあらためて見つめ、考えさせることが大切です。「感謝」の反対は「当たり前」です。子どもたちは、まず、いかに自らが「当たり前」のように家庭・地域で愛され、守られ、慈しまれているかに気づかねばなりません。その気づきが感謝の思いへと変わる先に「親孝行」があり、ふるさとへの愛着と誇りも生まれてくるものと信じます。

子どもたちは、期待に満ちた目で「人に見（守）られる中」でこそ真っすぐに育ちます。私たちは保護者の皆様をはじめとして、一人でも多くの地域の方々に学校へ期待と信頼を寄せていただき、地域（家庭）と学校が「善き口癖と善き心癖」にあふれるよう今後も努めて参ります。引き続きのご協力とご参画をどうぞよろしくお願いいたします。

